様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：４７６０５
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０２８８

研究課題名（和文）　ジョージ・バーミンガムと北アイルランド小説の新たな展開に関する研究

研究課題名（英文）　A Study on George A. Birmingham and a New Development of Northern Irish Fiction

研究代表者
八幡　雅彦（MASAHIKO YAHATA）
別府大学短期大学部・地域総合科学科・教授
研究者番号：50166568

研究成果の概要（和文）：ジョージ・A・バーミンガム（1865-1950）を中心に北アイルランド小説の普遍的意義と価値を解明した。バーミンガムの初期のふたつの小説が巻き起こした論争がいかにアイルランドの歴史を揺り動かしたかを分析し、そしてこの騒動によってバーミンガムは、人々の融和のためにはユーモアが不可欠という普遍的真理を備えた小説を書くに至ったことを実証した。北アイルランド小説の新たな展開に関しては、グレン・パタソン（1961－ ）、シャロン・オウエンス（1968－　）らの小説が、紛争に囚われぬ新しい姿の北アイルランドを描き、どのようなグローバル性を備えているかを提示した。

研究成果の概要（英文）：My study purported to reveal the universal significance and value of Northern Irish fiction with the main focus on George A. Birmingham. Through the analysis of the controversy caused by Birmingham's first two novels I proved that this troubled experience enabled Birmingham to write universally appealing novels which emphasize the importance of humor. Regarding the study on a new development of Northern Irish fiction, I showed that Glenn Patterson(1961－　) and Sharon Owens(1968－　) portrayed the new Northern Ireland which provides other topics than the Troubles.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：北アイルランド小説、ナショナリズム、ユニオニズム、ユーモア、融和、普遍性

１．研究開始当初の背景

（１）当該研究者の北アイルランド小説に対する関心は 1988 年３月に初めてアイルランドを訪れた時に始まった。アイルランド人に親切にしてもらった体験から、なぜ北アイルランドでは数世紀にわたる紛争が続いているのだろうという疑問を抱き、小説家たちはこの紛争をどのように描き、どのような解決策を提示しているのだろうかという研究を開始した。その中で最も関心を覚えたのがジョージ・A・バーミンガムとグレン・パタソンであった。両者ともナショナリスト（アイルランド統一要求派）、ユニオニスト（イギリスへの残留主張派）どちらにも与すること

なく「融和」を模索する姿がうかがえた。

（２）北アイルランド小説の研究開始当初の当該研究者の関心は、「ナショナリズム、ユニオニズムどちらが正当か」という北アイルランド問題に限った狭義のものであったが、バーミンガム、パタソンの作品を読んでゆくうちに彼らの小説の持つ「普遍性」を実感するようになった。すなわちバーミンガムの提示する「ユーモア」の必要性は、北アイルランド紛争のみならず世界中の人間同士の対立の解消にとって不可欠なものである。パタソンの場合は、紛争の実態を露呈すると同時北アイルランドを様々な視点から描き、紛争の実態を露呈すると同時に、北アイルランドが紛争を乗り越えて発展する姿を描くことによりそのグローバル性を呈示している。

（３）当該研究者は今回の科学研究費以前にも、いずれも基盤研究（Ｃ）で、３度の科研費の受給を得た。「北アイルランド出身の小説家 George A. Birmingham の再評価」（平成 10 年度～13 年度）では、バーミンガムの小説は北アイルランドの対立問題だけでなく、人間一般の対立問題の融和を考える上でも重要な作家であることを呈示した。「北アイルランド小説の可能性－ジョージ・A・バーミンガムを中心に－」（平成 14 年度～17 年度）では、北アイルランドにはバーミンガム以外にもパタソンを始め普遍的な意義を持った小説家が数多くいることを実証した。「ジョージ・バーミンガムとグレン・パタソンを中心とする北アイルランド小説の研究」（平成 19 年度～21 年度）では、バーミンガムのユーモアの精神は彼の深いキリスト教信仰から生まれたものであることを解明した。またパタソンの小説に関しては、日本を舞台にした作品の分析を中心に、グローバル性を呈示した。

２．研究の目的

（１）北アイルランドの文学においては詩と演劇が注目を浴びており、小説は軽視される傾向にある。本研究の目的は、バーミンガム、パタソンを中心とする北アイルランドの小説家たちが、詩と演劇に劣らぬ、どのような意義と価値を有する作品を書き続けているかを明らかにすることであった。そして北アイルランド文学の根底には常に「カトリック対プロテスタント、ナショナリスト対ユニオニスト」という主題があるが、1998 年のベルファスト和平合意以降北アイルランドの小説家たちは、この対立以外のグローバルな主題についても書き始めた。この北アイルランド小説の新たな展開にも着目した。

（２）当該研究者がバーミンガムに注目したのは、北アイルランドのプロテスタント・ユニオニストの家庭の出身でありながら、ナショナリズムに共鳴してアイルランドの統一を支持し、ユーモア小説によってナショナリストとユニオニストの融和を訴えたという事実による。同時にバーミンガムは、大学卒業後の 1888 年から亡くなる 1950 年までアイルランド国教会、イギリス国教会の聖職者を務めた。R.B.D.フレンチは、ナショナリズムとユニオニズムの挟間で苦悩する若き主人公たちを描いたバーミンガムの初期の政治小説を、「キリスト教道徳者の作品」と呼んだ。しかし「荒唐無稽」と軽んじられる傾向にある後期のユーモア小説もまたバーミンガムの深いキリスト教道徳から生み出された、人々の融和を真に願う作品であるというのが当該研究者の見解である。また詩人 W.B.イェイツや小説家グレアム・グリーンはバーミンガムの深いキリスト教精神に感化された作品を書いている。今回の研究の目的は、バーミンガムの小説とキリスト教信仰の関わり、バーミンガムが他の作家たちに与えた影響をさらに深く追究することであった。

（３）バーミンガムは、存命中は幅広く読まれていたが、死後は忘れ去られた存在となった。バーミンガムの価値に着目したのはダブリン大学トリニティ校の R.B.D.フレンチで、彼はバーミンガムの娘アルテア・ハニーと親交を保ち、彼女から、おびただしい数のバーミンガムの書簡、小説の原稿、家族写真、新聞・雑誌等に発表されたエッセイや書評の提供を受け、J.O.Hannay Papers として整理し、後世の研究者たちに道を開いた。フレンチ自身、バーミンガムに関する研究書を出版することを目論んでと思われるが、志を遂げることなく他界した。1995 年、バーミンガムに関する最初の研究書 Brian Taylor, *The Life and Writings of James Owen Hannay(George A. Birmingham)* が出版された。これはバーミンガムの伝記、書誌としての価値は高く、当該研究者自身もバーミンガムに関する資料、論文を入手する上で数多くの恩恵を被った。しかしバーミンガムの作品分析としては不十分で、ミスと誤植が多く、信頼されうる研究書とは言い難い。したがって当該研究者の今回の研究のもうひとつの目的は、信頼されるバーミンガム研究書を将来出版するための準備を行うことであった。

（４）北アイルランド小説全般に関する先駆的研究書としては John Wilson Foster, *Forces and Themes in Ulster Fiction*(1974) が挙げられる。これは、バーミンガムを含め、ウィリアム・カールトン William Carleton(1794-1869)からブライアン・ムーア Brian Moore(1921-1999)に至るまでの北

アイルランドの小説家たちを論じ、彼らの作品が持つ様々な「力」と「主題」を明示した名著である。時を経て、ベルファスト和平合意が締結された1998年にLaura Pelaschiar, *Writing the North: The Contemporary Novel in Northern Ireland*が出版された。これは、ムーア以降の現代北アイルランド小説家たちを取り上げ、パタソンやロバート・マックリアム・ウィルソン Robert McLiam Wilson(1964-)等が、紛争を経て平和へと向かう北アイルランドの過渡期をどのように描いているかを論じている。2003 年には当該研究者が『北アイルランド小説の可能性－融和と普遍性の模索－』(溪水社) を出版し、バーミンガム、ムーア、パタソン、ウィルソン等7人の小説家を取り上げ、彼らの小説がどのように北アイルランドの対立宗派の融和を模索し、どのような普遍的価値と意義を有しているかを論じた。拙著出版前後から北アイルランドは現代的なヨーロッパ社会へと向かってさらに大きく変貌した。それに伴って Joe Baker, *Offcomer*(2001)や Sharon Owens, *The Tea House on Mulberry Street*(2005)のように、紛争以外の、人間生活一般の事象を主題にした小説が次々に登場している。今回の研究においてはこの北アイルランド小説の新たな展開をも論じ、北アイルランド小説のグローバル性を明らかにすることも目的とした。

３．研究方法

（１）平成 22 年度はロンドンの大英図書館でバーミンガムがジョージ・バーナード・ショーと交わした私信を調査するとともに1913 年にロンドンで上演された *General John Regan* の舞台脚本を入手した。またベルファストの北アイルランド公文書館でバーミンガムが別の知人と交わした私信を調査した。クイーンズ大学ベルファスト校図書館でシャン・F・ブロック Shan F. Bullock (1865-1935)のアーカイブの研究に当たった。ダブリン大学トリニティ校図書館でバーミンガムのアーカイブ（J/O/Hannay Papers）の調査研究に当たるとともに、アイルランド国立図書館でバーミンガムが『アイルランド国教会報』に投稿した記事を収集した。またベルファストではグレン・パタソンに会いインタビューを行った。

（２）平成 23 年度は北アイルランド公文書館で再びバーミンガムの私信の調査に当たり、またベルファスト中央図書館でリン・C・ドイル Lynn C. Doyle (1873-1961) のアーカイブの研究に当たった。ダブリン大学トリニティ校図書館ではバーミンガムのアーカイブの研究に当たり、未発表の演劇 *Parnell* の原稿を読むことができた。さらにはバーミンガムについて書かれた博士論文を閲覧した。シャロン・オウエンスの作品を読んだ。

（４）平成 24 年度はベルファスト中央図書館でバーミンガムに関する新聞記事を収集した。グレン・パタソンに会い、新作小説 *The Mill for Grinding Old People Young* (2012) の舞台を案内してもらった。ダブリン大学トリニティ校図書館では、バーミンガムがゲーリックリーグの創始者ダグラス・ハイドと交わした私信の調査研究に当たった。

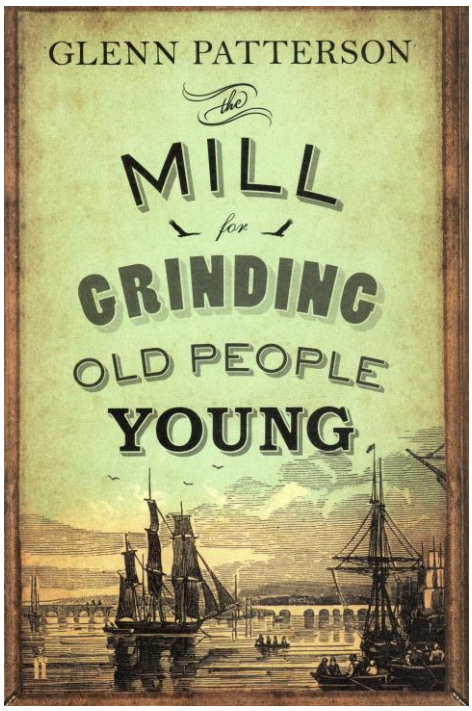
４．研究成果

（１）平成 22 年度においては３つの研究成果があった。ひとつは、1913 年にロンドンで上演された *General John Regan* の舞台脚本を入手したことである。過去、当該研究者はこの作品を論じるために小説版（1913 年）と改訂された演劇版（1933 年）を用いてきたが、このオリジナル脚本の入手によってこの作品をより正確に論じることが可能になり、その成果を翌年ウェストポート歴史協会の機関誌 *Cathair Na Mart*, No.30 に論文発表した。第２の成果は、第二次世界大戦におけるイギリスとドイツの戦いを、ユーモアをこめて描いたバーミンガムの小説 *Appeasement* (1939) を読み、IASIL JAPAN 学会で研究発表したことである。この小説も、人間同士の融和のためにはユーモアの精神が不可欠であることを実証した作品であり、バーミンガムの愛と寛容に基づいたキリスト教精神とユーモアの結びつきをさらに強く認識した。第３の成果は、バーミンガムに関するホームページ（http://geo-birmin.com）を作成したことである。これを通して北アイルランドの研究者と知り合い、バーミンガムに関する貴重な情報を提供してもらえるようになった。

（２）平成 23 年度は、ベルファスト中央図書館でバーミンガムと同時代を生きた小説家リン・C・ドイルの書簡・原稿・新聞記事等を集めたアーカイブに巡り合えたのは貴重だった。ドイルもまた、バーミンガム同様、過少な評価しか受けていない作家だが、このアーカイブの存在は、今後ドイルの小説を研究しその価値を明らかにしてゆく上で大きな手助けとなる。またダブリン大学トリニティ校図書館では、長年探し求めていたテレーズ・ロウによるバーミンガムに関する博士論文に巡り合えた。今回はざっと目を通しただけだが、今後バーミンガムの研究を続けてゆく上で貴重な文献のひとつとなる。さらに同図書館では、バーミンガムの未発表の演劇で、1930 年代に書かれた *Parnell* の原稿を読むことができた。この時期、バーミンガムはも

っぱらユーモア小説を書き続けていたが、これはバーミンガムの初期の深刻な政治小説を思い起こさせる作品で、彼は常にアイルランドンことを憂い、真に人々の融和を願っていたことを再認識した。北アイルランド小説の新たな展開に関しては、シャロン・オウエンスを取り上げた。彼女は、紛争以外の、人間生活をテーマとする悲喜こもごものドラマを描き続け、北アイルランドのグローバル性を訴えている。この研究成果に関しては、日本アイルランド協会年次大会で口頭発表し、『別府大学短期大学部紀要』第 31 号に論文発表した。

（3）平成 24 年度は、ベルファスト中央図書館でバーミンガムに関する地元の新聞記事を収集した。ジャック・ロンドンとの親交を示す記事があり、バーミンガムが生前どれだけ高く評価されていたかを知ることができた。またグレン・パタソンに会い、彼の新作小説 *The Mill for Grinding Old People Young* (2012)の舞台となったベルファスト市街地を案内してもらった。このことによって同作品に対する理解を深め、10 月には大分県アイルランド研究協会の例会でその時の体験について語った。パタソンは過去ベルファストを様々な視点から描いてきた。この小説は、諸外国との関わりを通してベルファストが発展する姿とその暗部を描いており、また新たな視点からベルファストを描き、そのグローバル性を示しているといえる。



Glenn Patterson, *The Mill for Grinding Old People Young*

またこの年の８月下旬にはダブリン大学トリニティ校図書館を訪れ、バーミンガムがダグラス・ハイドと交わした書簡を調査・収集した。バーミンガムの初期のふたつの小説がゲーリックリーグ内で大きな波紋を引き起こし、ゲーリックリーグは分裂の危機を迎えた。ふたりの手紙のやり取りからは、このふたつの小説はアイルランドの歴史を変えそうなインパクトを持っていたことがうかがえた。このことは平成 25 年３月に日本アイルランド協会の学会誌『エール』第 32 号で論文発表した。またバーミンガムはこの騒動によってゲーリックリーグの幹部から身を引き、後にゲーリックリーグとの関わりを「短く不幸な関係だった」と述懐した。しかし実際にはこの体験があったからこそバーミンガムは「ユーモア」を基調とした人間愛に富む普遍的な価値を備えた小説を書くようになったと思われる。このことについても、平成 25 年３月にウェストポート歴史協会の機関誌 *Cathair Na Mart*, No.31 に論文発表した。

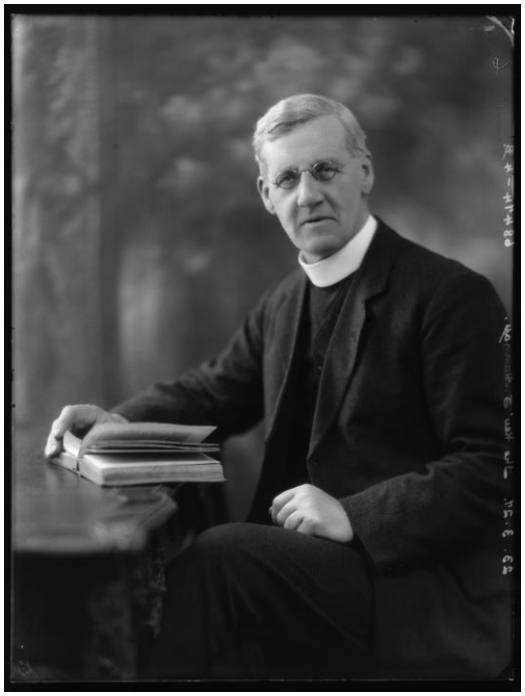
（4）今回の研究が国内外に与えたインパクトに関しては、『別府大学短期大学部紀要』はインターネットで閲覧可能で、当該研究者の論文へのアクセス数が上位に入っているという事実から、徐々に北アイルランド小説の意義と価値に対する一般認識は深まりつつあると推測する。また平成26年に刊行予定の『イギリス文化事典』（丸善出版）は「北アイルランド小説」の項を設け、当該研究者が執筆することになっている。これは当該研究者の研究によって、北アイルランド小説の意義と価値が徐々に認められてきたためだと推測する。さらに当該研究者はバーミンガムに関するホームページを作成したが、国外の研究者からの問い合わせがあった。今後の研究の展望は次の通りである。

①バーミンガムの未読の作品を読み、彼のキリスト教信仰とユーモアの関連性をさらに明らかにする。

②W.B.イェイツ、ジョージ・バーナード・ショー、グレアム・グリーンらがバーミンガムからどのような影響を受けたかを明らかにする。

③グレン・パタソン、シャロン・オウエンスを始めとする現代小説家たちがどのように北アイルランドのグローバル性を描いているかを明らかにする。

以上の研究の集大成としてバーミンガムに関する研究書（英語）と北アイルランド小説に関する研究書（日本語）の出版を目指している。



ジョージ・Ａ・バーミンガム

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
１．八幡雅彦「ジョージ・Ａ・バーミンガム『煮えたぎる釜』と『ハイヤシンス』－アイルランドの歴史を揺り動かしたふたつの小説」（日本アイルランド協会『エール』第 32 号、2013 年３月）、pp. 103-116.　査読有。

２．Masahiko Yahata, “George A. Birmingham in the Gaelic League: The Stepping-Stone to a Universally Appealing Novelist” (Westport Historical Society; *Cathair Na Mart*, No. 31, March, 2013), pp. 91-104. 査読有。
URL: ci.ni.ac.jp/naid/120004972690

３．八幡雅彦「ジョージ・Ａ・バーミンガムの短篇小説「命がけの愛」」（『別府大学短期大学部紀要』第 32 号、2013年　２　月　）、pp. 115-121.　　査読有。
URL:http://repo.beppu-u.ac.jp

４．八幡雅彦「シャロン・オウエンス『マルベリー通りの喫茶店－北アイルランド小説の新たな展開－』」（『別府大学短期大学部紀要』第 31 号、2012 年２月）、pp. 53-66. 査読有。
URL: http://repo.beppu-u.ac.jp

５．Masahiko Yahata, “George A. Birmingham, *General John Regan*: A Hearty Wish for Reconciliation between Every Human Being” (Westport Historical Society; *Cathair Na Mart*, No. 30, December, 2011), pp. 8-18.　査読有。
URL: ci.ni.ac.jp/naid/120004972690

６．Masahiko Yahata, “Metaphors in Glenn Patterson’s Novels with Special Emphasis on *The Third Party*” （『別府大学短期大学部紀要』第 30 号、2011 年２月）、pp. 65-74. 査読有。
URL: jairo.nii.ac.jp/0127/00003301

〔学会発表〕（計７件）
１．八幡　雅彦「北アイルランドの小説家ジョージ・Ａ・バーミンガム」、熊本アイルランド協会市民講座、2012 年 12 月１日、お菓子の香梅帯山店

２．八幡雅彦「ベルファストを歩く－小説家グレン・パタソンとともに－」、大分県アイルランド研究協会例会、2012 年 10 月 27 日、別府大学短期大学部
３．八幡雅彦「小説家ジョージ・Ａ・バーミンガムとゲーリックリーグ」、日本ケルト協会九州支部例会、2012 年３月３日、西南学院大学

４．八幡雅彦「シャロン・オウエンスの「ベルファスト３部作」－北アイルランド小説の新たな展開－」、日本アイルランド協会年次大会、2011 年 12 月３日、青山学院大学

５．八幡雅彦「北アイルランドに魅せられて」、熊本アイルランド協会総会招待講演、2011 年 11 月 26 日、熊本市ジャンジャンゴー

６．八幡雅彦「ある北アイルランドの小説家の跡を訪ねて」、大分県アイルランド研究協会例会、2011 年７月２日、別府大学短期大学部

７．八幡雅彦　“George A. Birmingham, *Appeasement*: War, Humor and Christianity”、第 27 回 IASIL JAPAN 国際大会、2010 年 10 月 10 日、東京大学

〔その他〕
ホームページ等
http://geo-birmin.com「小説家ジョージ・Ａ・バーミンガム」

６．研究組織
(1)研究代表者
八幡　雅彦（MASAHIKO YAHATA）
別府大学短期大学部・地域総合科学科教授
研究者番号：５０１６６５６８